

昭和の南海地震体験談

氏名:井上 寿雄(いのうえ としお)
生年月日:本人の希望により不掲載
地震を体験した場所:新宮市
当時の家族状況:父、母、弟、妹

本人の希望により写真は
掲載しておりません。

1)地震発生時の状況

当時 21 歳で終戦後、軍隊から郷里の新宮に帰還して半年くらい経っていた。

その頃、向こう三軒両隣や隣組という制度があって、交代で火の用心の夜回りをするようになっていた。

当日、夜回りの当番にあたり、朝 3 時から 5 時までが受け持ち時間で、2 人で現在の大橋通りの交差点から 30m ほど東に入った路地を見回り中の朝 4 時頃に地震が起きた。普通に立っていることが出来ず、踏んばるしかなかった。電柱は揺れ、電線の繋ぎ目がショートし、人間にも電気が走り、胸が悪くなった。神倉山から”ゴー”というような低いにぶい音の山なりがあった。

地震が治まるのを待って帰宅したが、そのときはまだ火は出ていなかった(出ていたかもしれないが、火は小さかったはずである)。火は裏手から回ってきたが、燃え上がる勢いで顔が熱く火照ってきた。自分の家の家財道具を出すのに精一杯で、近所の人たちがどうしていたかは記憶にない。

2)津波襲来時の状況

地震の後、津波が来ることは考えたこともないし、聞いたこともない。

海岸付近に津波が押し寄せてきたかどうか何も知らない。

3)家族の行動・被害

家族は皆家にいたが、火が回ってきたので家財道具を近くのとつ角(現在の大橋通り4信号)まで、何回も行ったり来たりして運んだが、4割近くを火事場泥棒に盗まれてしまった。

終戦後の物のない時代だったので、運ぶのを手伝うと見せかけて、そのまま持ち逃げされてしまった。

夜が明けて、人の顔がほのかにわかりかけてきたときに、家の太物(柱)がガタッと崩れ落ちた。幸い家族皆無事で、交差点のところから、家が全焼した後、完全に崩れ落ちるのを見届けた。その日はどこで過ごしたかは覚えていない。

4)集落・周囲の被害

火は2～3日燃え続けた後、火災に見まわれたのは北は速玉神社の手前から、南は現在の谷地医院(大橋通り4丁目)のあたりまでと広範囲のものだった。

火の手が速く、崩れ落ちてきた屋根や柱で下敷きになり身動きが取れず、犠牲になった人もいたようだ。現在の大橋通りの一体はきれいに全焼した。なぜ火を消すことができなかったのは、水道のパイプが地震で破裂し溜まった水しか噴出すことができなかったからだと聞いている。

地震や火災による家屋の倒壊で、通路が遮断され、わずかな台数の消防車の出動も遅れた。

5)地震・津波後の生活

当時火災保険には加入していたが、地震による火災ということで保険金は支払われなかった。

火災後、何日かして、本廣寺近くの長屋で寝泊りをした。支援物資は軍隊の服が配給されたが、食糧関係はなかったと記憶している。寒さのため軍隊の防寒外套も着たし、軍隊から戻ってくるときにもらった履物も履いた。界限は見回す限り、軍隊の払い下げを着た人たちで氾濫した。普通の服やシャツを着た人はほとんどいなかった。

闇の買出しで、米や芋、野菜、食べるものは何でも手に入れたが、肉や魚は縁遠い話だった。畑を持っていた人は一生懸命野菜作りをしていた。

昭和22年の終わり頃からパラパラと家が建ち始めた。

6)次の災害への備え

非常食を用意しておくこと。それと少しでもタンクに水を入れておけば、飲料水にもなるし、火消しの水にもなる。

経験から地震と火事とでは、火事の方が恐ろしい。

地震は少しでも物は残るが、火事なら全部燃え切ってしまうので残るものがない。

教訓から風呂桶の水はその日に抜いてしまわず、翌日使用するまで溜めておくのを習慣とするのが良いのではないか。

7)その他

1944年の東南海地震の際は、軍隊にいたため直接体験はしていない。

これは聞いた話であるが、現在の国道42号線から仲ノ町商店街の入り口の所に当時丁子屋という呉服屋(現在は八百屋)があり、地震で潰れたそうである。